

◎『すべて神の御霊に導かれる者は、神の子供である。』（ロマ書第8章14節）

新『教会通信』（2018年9月）

☆（聖書に今日を聞く）☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 絃

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ！

願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と喜悅と感謝とは、恒に主の御霊を崇め、主の御再臨を待ち望む真の信仰者と偕に在らんことを……。

◎『それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。

古えの人（ユダヤ人）は之によりて証せられたり。』

（ヘブル書第11章1, 2節）

旧約聖書は勿論のこと初代教会時代を記述した新約聖書の登場人物も、その殆どがユダヤ人つまりヘブル民族であります。

何時も思われる処であります、聖言に示された彼等の信仰心が後の世代に証せられたとある如くに、彼等の一途な信仰心の強靱さには、ほとんど感服の外ありません。

此のヘブル書第11章には、旧約に活躍した多くの先人達が名を連ねており、そこに登場する人物の一人ひとりに想いを馳せておりますと、時の経過も忘れて仕舞う程に彼等の真摯な信仰に魅せられて参ります。

しかし末の世と言われる現代の信仰の中に活かされている私から観ましたら“足下にも及ばない”と思える彼等の生活行動を、神は聖書を通してそれ程高くは評価なされておられない事に、主の厳しき査定の程が偲ばれ、自らを含めた現代人の信仰の在り方を、今一度振り返らざるを得ません。

◎『信仰なくしては神に悦ばるること能わず、それ神に来たる者は、

神の存すことと神の己を求むる者に報い給うこととを、

必ず信ずべければなり。』（ヘブル書第11章6節）

ユダヤの人々は、神に対して常に素朴で従順な信仰の中を疑う事を知らずに歩んで来たかのように、私には思われます。

上記二つの聖言を心の目を止めて見詰めておりますと、聖言そのものが心に体当たりを食らわせて揺さぶりを掛け、“どうだ、お前の信仰は大丈夫か”と言われていたような直向きさが伝わって参ります。

その信仰を、私にも戴きたい、と祈らざるを得ません。

更に此のヘブル書第11章の終わりには、信仰とはこれ程までにも凄まじい戦いを経て魂の勝利を得なければならないのか、と自らを顧みさせられる記事が掲載されております。

◎『ある人は更に勝りたる復活を得んために、
免されることを願わずして極刑を甘んじたり。
その他の者は嘲笑と鞭と、また縄目と牢屋との試練を受け、
或る者は石にて撃たれ、試みられ、鐵鋸にて挽かれ、
剣にて殺され、……』 (ヘブル書第11章35節～37節)

また此の第11章には、『信仰によりて』『信仰によりて』との書き出しで旧約聖書の登場人物や集団に触れている箇所が二十カ所あります。

◎『信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、
見ゆる物の顯るる物より成らざるを悟る。』
(ヘブル書第11章3節)

萬物は神の御心の儘に創造された物であり、生命体を始めとしてどれ一つとして神の御旨に由らない物は、此の世に存在しません。

残念ながら現代社会では、萬物の創造者であられる唯一の神、我等の主イエス・キリスト様のご存在を受け入れようとは致しません。

十七世紀ヨーロッパ(英国等)から、カトリックの教えに反旗を掲げた清教徒を始めとする奔放な信仰を求めて次々とやって来て建国されたアメリカでは、その後、州法に依って進化論を学校で教える事を禁じていた州が多かったと聞いておりましたが、今では殆どの州でダーウィンが体系付けた進化論を取り入れていると言われております。

人間の思い上がりは、地上に存在する神の創造物ばかりか宇宙へと広がり、日本でも宇宙ロケットを飛ばして、小さな惑星の粉塵を採集して地球や天体の起源と構成要素を探り出そうとする、と言う報道がありました。

去る7月、人々の記憶から薄れかけていた或る宗教団体の大量殺人事件の首謀者とその側近の者達十三名の死刑が執行されました。

東京の混雑する地下鉄に猛毒薬サリンを撒いて多くの死者と、三十年を経た今日でもその後遺症で苦しむ者がいると言われる多数の被害者を出した、正しくサタンの仕業としか思えない不可解な集団に依る事件ではありました。

そんな折、台風第7号が日本海を遡上するのに影響された太平洋側の湿った高気圧やら北方に停滞していた梅雨前線やらを巻き込んで、数十年に一度と言われる豪雨による大災害がもたらされた事は今だに記憶に新しい出来事であります。

西日本の地域に、死者と安否不明者合計で二百名を超えた大惨事となり、何千軒或いは何万軒もの家屋が、流失したり損壊しました。

どれ程の乗用車や貨物車が、使用不能になったか知れません。

平成に成って三十年、最大の降雨に依る被害と言われております。

七年前の東日本大震災に依る大きな災害も、忘れる事は出来ません。

さて、こう言った自然災害は、一体誰が悪いと言えるのでしょうか？

はたまた、誰が罰せられるべきなのでしょう？

人間による犯罪ならば、損なわれた人間の生命に対して罰する事も出来ますが、これらの大災害の責任は、一体誰に求めたらよいのか？

自然界に於ける天災の被害は、年々にその威力を増し、数も多くなって来ております。台風は、八月も記録的にその数を増やして災害をもたらせております。

天地を創造なされた御方は、我等の神様であります。

天地の運営を為さっておいででの御方も、主イエス様であります。

天変地異の総ては、神の御心の儘に、又は赦しの中に起こっております。

神の御心を突き動かしているのは、神の被造物に過ぎない人間の飽くなき野望に対する御怒りであります。

だからと言って、誰が神を責める事が出来ますか？

否、天変地異を意図的に為さっておいででの御方が存在している事に、気付いている人間が果たしてどれ程いるのでしょうか？

今の時代、次から次へと起こって来る此等の現象は、創造主であられる主イエス・キリストなる真の神を信じようとしなない者へのお怒りであり、公然と神の御摂理に対抗するが如き人間の不遜に対する通告であり、此の地上を一度滅ぼして一新なされると言う神のご経綸への予告的前触れでもあります。

終末的現象は、日本国内ばかりではありません。

火山の噴火、大地震、津波、台風、気温の上昇、早魃、異常乾燥と熱波の中の広大な面積の山火事等々、今後ますます激しさを増して頻繁に起こって来る事をその筋の学者達が口にしております。

昔、人間の始祖アダムとエバは、神の言い付けに背いて禁止されていた樹の実を食べて仕舞いました。

その果実を食べると、彼等の目が開かれて神の如く善悪を識る事になるから是を食べてはならない、と神は彼等に禁止令を出しておられました。

当時、アダムとエバは善悪の悪、つまり悪の根源であるサタンの存在を全く識りませんでした。

悪を知らない彼等に取りまして、愛にして善であられる神の庇護の許、快適に生きる事への何の障害もありませんでした。

しかし、二人のうちエバには未知なる物への好奇心が強かったと見えて、其処にサタンに付け込まれる隙を与える事になります。

実際に、エバがその樹に近寄りマジマジと視ておりますと、美しく如何にも美味しそうで、その上これを食べたなら智慧くなれそうに思えたエバはそれを取って喰らい、アダムも呼んで分かち合いました。

神の御前に、彼等は始めて罪を犯したのです。

神は、他の総ての被造物とは区別して、人間を創造なさいました。

他の被造物を支配する立場として人間を創られ、神の像の如くに其の人格性を備えた存在として創られたのであります。(創世記第1章27節)

それは言葉を換えますと、被造物の中では人間だけに自己の意志が与えられており、つまり、神のご命令に従う事も従わない事も、自由に選択が出来たと言う事でありました。

その後、二人はエデンの園を逐われます。

神に庇われ護られていたエデンの園とは異なり、彼等が生活をするようになった地上では、自らの智慧と能力で生きて行かねばなりません。

エデンの園を逐われる原因となった樹の実には、善悪を識る事とそれを食べたなら智慧くなれそうだと予測した通りに、地上生活での不便を克服する智慧を彼等は奇しくも持ち合わせる事になりました。

以降、代々、人間は知恵を増幅させて生き存えて参りました。

旧約聖書の記事に依りますと、神の存在と神の『愛』を忘れた無秩序な人間が人間なりに得た知恵を以て榮えて参りますと、神のお怒りは沸点を超えて、その世界・その街・その人類を壊滅させておられます。

創世記第6章から第9章に至る記事にあるノアの時代に起こった事、及び創世記第18章20節より第19章18節に至るソドムとゴモラの街に起こった出来事に、神の御性質である確固たる『愛』と、愛するが故の厳しい嫉みが伝わって参ります。(ヨシュア記第24章19節など参照)

モーセの十戒の中、その第二戒の偶像崇拜に対する説明文に

◎『我エホバ汝の神は嫉む神なれば……』と、出エジプト記第20章5節及び申命記第5章9節に記されております。

天地萬物を創造為された我等の神は、神の存在を忘れ、人間的智慧の限りを尽くして天地の成り立ちや生物の出生を人間の領域の中で極めようとする学識に対して、決して褒め称える事はなさいません。

◎『誰も自らを欺くな、汝等のうち此の世にて自ら智しと思う者は、
智くならんために愚かなる者となれ。
そは此の世の智慧は神の前に愚かなればなり。
録して“彼は智者をその悪巧によりて捕らえ給う”
また“主は智者の念の虚しきを知り給う”とある如し。』

(コリント前書第3章18節～20節)

世的な学者達は、此の地球の誕生とか、人類の誕生など臆面もなくその年代を公表して憚りませんが、宇宙も地上の総ての物も、その名をイエスと仰有り、御自ら“父”と“子”と“聖霊”を示現し給う唯一神の御旨と御言に依って創造されたのであります。

上記の聖言、“此の世の智慧は神の前に愚かである”であるから“自分が賢いと思う者は、賢くなる為に愚かとなれ”とのご意見は、無から有を生じせしめる天上天下に唯一の神様が仰有っておられるのであります。

全宇宙と言われる天上界の総ては、今も是からも、ずっとずっと神の所有であり、やがて時が参りましたら義しき信仰者の神の子達に解放されますが、それ迄、勝手にその領域に立ち入る事は、神がお赦しにはなられません。

さて、台風に関するお証^{あかし}を一つ申し添えておきます。

先の七月、大変に気温が高い日々が続き、又とても雨が少なく、教会では毎夕、庭の植物への水遣りに時間と労とを必要としておりました。

恵みの雨が欲しい、と朝の祈祷会^{つど}に集っている聖徒方と共にお祈りをお献げ致しました。

丁度、和歌山イエス之御霊教会に於ける関西大聖会を控^{ひか}えており、約一週間、牧師が教会を留守にする事もあり、真摯^{しんし}な^{いの}祈りでありました。

大聖会への出発の直前に台風第12号が発生し、天気予報官のテレビでの予想の中に太平洋上を大型化しつつ北上して、八丈島辺りで方向を変え伊豆半島を直撃するやも知れぬ、と進路予想図が示されます。

その儘^{まま}、関西大聖会に聖徒方と共に出席し、第一日目・二日目と過ぎて土曜安息日の朝、一人の牧師がスマートフォンで台風の進路^{とら}を捉え、いよいよ伊豆半島直撃ですよ、と私に指し示します。

国内の各地から、そして外国からも各教会が参加しております大聖会ではありますが、台風の予想進路にある教会は我等の伊豆イエス之御霊教会だけであり、重荷を負って大聖会の御堂^{みどう}の中で祈らされました。

その夜、投宿するホテルに還^{かえ}って聖徒方と伊豆地方の台風の状態をメールや電話で確認しましたが、全く異常は無いとの事、雨も風も台風とは思えない静かな状況であるとの返信。

台風は伊豆半島先端の下田沖^{するが}を駿河湾へと曲線を描き、やがて南下して関西から瀬戸内海沿岸を舐めるように下りて行きました

帰宅して解った事ですが、台風12号は、熱海、湯河原、小田原と言った相模湾沿いの海岸に大きな傷跡を残しておりました。

にも拘^{かか}わらず、伊豆の教会も神奈川県在住の聖徒方にも、被害は全くありませんでした。

その後^{こくしよ}に引き続く幾つかの台風も、酷暑を中断し恵みの雨をもたらすものとなって助かっております。

真剣に神に祈^{いの}る^{いの}祈りには、神も真剣にお答え下さいます。

天変地異は、今後益々^{もうい}猛威を振るう事でありましょう。

しかし、人間にはそれを停止させる智慧も能力もありません。

それがお出来になるのは、天地創造の神のみであります。

◎『まことに汝らに告ぐ、

人もし此の山に“移りて海に入れ”と言うとも、

其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑^{うたが}わずば、

その如く成るべし。』

(マルコ傳第11章23節)

◎『この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、

すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。』 (マルコ傳第11章24節)

私たちが、主イエス・キリストの十字架に依る御業を経て開かれた御救い“水と霊”(ヨハネ3:5)のバプテスマを戴いて神の子とされている事を確信しているならば、そう信じて祈る禱りは神に聞かれ、神の御力に導かれて祈らされた内容は必ず成就致します。

私たちの信仰は、教会の講壇からのお勧めを聞いて、また聖書の聖言に触れてただ納得すれば良いのでは無く、聞いた事柄、拝読した聖言を自分の中にしっかりと取り入れて、実生活の規範とするべきであります。

聖書通りの信仰は、我々人間が真の神を探し求めた結果、真の神に出遭って信仰しているのでは無く、

◎『世の創の前より我等をキリストの中に選び、

御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて

己が子となさんことを定め給えり。』 (エペソ書第1章4,5節)

大昔から、神様が選んでおられた者達が、今、イエス之御霊を崇める真の教会に集わされておられ、神の子に相応しくなる為の教育を受けさせられております。それが、信仰者に与えられる試練であります。

人の肉の想いは頑なで、一朝一夕にして神の御心を自らの心と入れ替える事は困難ですが、常に禱りの中に在って神の導きに遵う習慣を繰り返しておりますと、神の御愛と憐憫の中に置かれている自分の存在が常道(常に遵守すべき道)化して参ります。

此の教会通信は当初、ヘブル書第11章に付いて語らせて戴こう、と思っていましたが、少しく横道に逸れて、残りの予定紙数が無くなって仕舞いました。しかし、これも神の御旨と感謝して参ります。

◎『信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に

出で往けとの命に遵い、その往く所を知らずして出で往けり。』

(ヘブル書第11章8節)

“衆多の人の父”また“信仰の父”と呼称されたアブラハムであります。彼は七十五歳の時、神から声を掛けられて行き先も不明の儘、その導きに遵って信仰生活のスタートを切りました。

◎『これ神の営み造りたまう基礎ある都を望めばなり。』

(ヘブル書第11章10節)

神を信ずる彼は、神様は決して下手な事は為さらない、最終的には必ず神の営み給う神の都、つまり天国へと召して下さる確信の中にありました。

◎『信仰に由りてアブラハムは試みられし時イサクを献げたり、

彼は約束を喜び受けし者なるに、その獨子を献げたり。』

(ヘブル書第11章17節)

彼は百歳にして授^{さず}かった目に入れても痛くない一人息子イサクを、神の言い付けに遵^{したが}って生^いけ贄^{にえ}として、神にお献^いげしました。

年老いた自分にお約束通りに息子を与えて下さった神は、その息子から多くの子孫が生まれ出るとの約束を信じて、例え此の子が死んだとしても、神は死人の中から甦^{よみがえ}らせる事が出来る御方^{おかた}であると信じておりました。

アブラハムも息子イサクも孫のヤコブも、皆、信仰の中で死にました。

彼等は生存中には、約束の物を受ける事は有りませんでした

◎『地^{たび}にては旅人^{たびびと}また寓^{やど}れる者なるを言いあらわせり』(11:13)

此の世では唯の旅人に過ぎない、自分達の生まれ故郷^{こきょう}も有るけれど

◎『されど彼^{した}らの慕^{した}う所は天にある更^{さら}に勝^{まさ}りたる所なり』(11:16)

彼等の信仰は、此の世の如何^{いか}なる物事^{ものごと}にも動^{どう}じない確信でありました。

そんな彼等に神は、彼等から神様と称^{とな}えられる事を喜ばれて、彼等の為^{みやこ}に天に都^{そな}を備えて彼等を迎え入れておられます。(ヘブル11:16)

此の世の泥水^{どろみず}を呑みながら、遠^{かなた}い彼方^{かなた}の天の都^{みやこ}を望^みむのでは無く、既に天の国籍も戴^{すで}いている私達は、神の約束を“確信”して参りましょう。

ハレルヤ！

(2018・9・1 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)